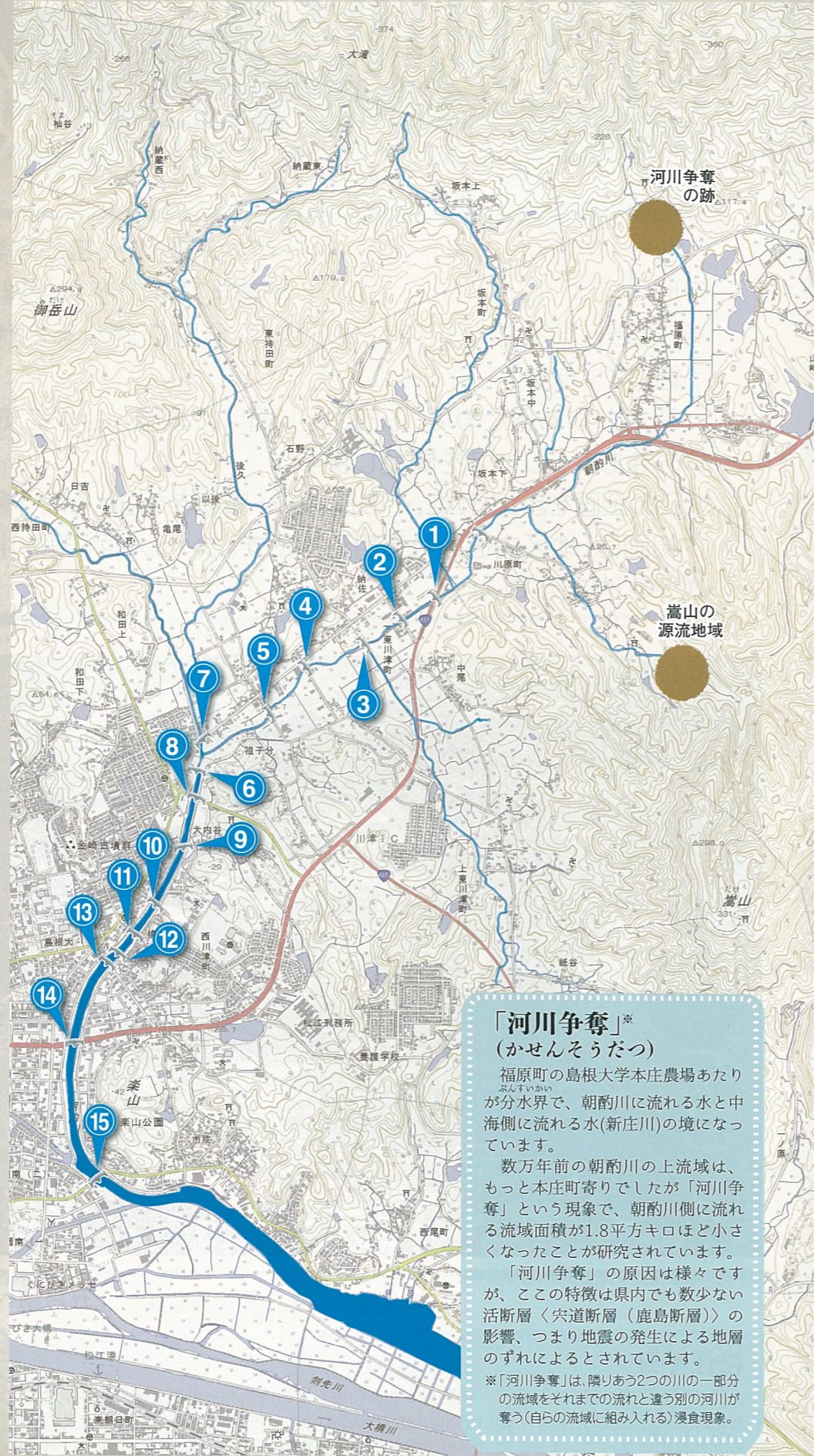


朝酌川はかつて「水草川」と呼ばれ、古代から流域に人々が住み、川を利用して移動し、周囲に農地が作られ、川津地域を育んだ“母なる川”といってもよいでしょう。

現在、堤防沿いに桜並木や遊歩道も整備され、憩いの場になっています。どんな特徴や歴史があるのでしょ。

川津地区内の橋は全部で15あります。多くの橋は、河川改修や区画整理事業で新しくつくられましたが、明治初年の記録には今の半分程度の橋が記載されています。「亀尻橋」「加羅加羅橋」「百足橋」などは100年以上前にも名前が見えます。当時は川幅も狭く簡易な土橋がほとんどでした。

- 1 中尾橋
- 2 亀尻橋
- 3 横田橋
- 4 納佐橋
- 5 口縄橋
- 6 海崎橋
- 7 笠無橋
- 8 嵩見大橋
- 9 嵩見橋
- 10 学園橋
- 11 宮尾橋
- 12 加羅加羅橋
- 13 橋本大橋
- 14 楽山橋
- 15 百足橋



**「河川争奪」※**  
(かせんそうだつ)  
福原町の島根大学本庄農場あたりが分水界で、朝酌川に流れる水と中海側に流れる水(新庄川)の境になっています。  
数万年前の朝酌川の上流域は、もっと本庄町寄りでしたが「河川争奪」という現象で、朝酌川側に流れる流域面積が1.8平方キロほど小さくなったことが研究されています。  
「河川争奪」の原因は様々ですが、この特徴は県内でも数少ない活断層(穴道断層(鹿島断層))の影響、つまり地震の発生による地層のずれによるとされています。  
※「河川争奪」は、隣りあう2つの川の一部分の流域をそれまでの流れと違う別の河川が奪う(自らの流域に組み入れる)浸食現象。



- 8 嵩見大橋
- 9 嵩見橋
- 10 学園橋
- 11 宮尾橋
- 12 加羅加羅橋
- 13 橋本大橋
- 14 楽山橋
- 15 百足橋



源流を遡る

朝酌川の嵩山水系の一つ、持田地区川原町の水系を遡ってみました。(左の地図参照) 集落や水田の間をのどかに流れ、やがて一跨ぎできるほどの幅になります。高台にある川原神社を過ぎると鬱蒼とした山。やがて砂防堰堤などに行き着き水流も地下に消えてゆきました。嵩山の地下に沢山の水が蓄えられています。(朝酌川の源流は北山山系の澄水山(標高507m)の山腹とされています)



朝酌川河川改修事業 工事概要図



朝酌川はゆるい勾配で、幅も10m前後、加えて大きく蛇行しており大雨のたびに氾濫していました。特に1964年(昭和39年)7月の集中豪雨では市内の住宅542戸が床上浸水、3,633戸が床下浸水、1972年(昭和47年)の水害では5,872戸が床上浸水、14,201戸が床下浸水の被害を受けました。1968年(昭和43年)に川津地内の町内会などが期成同盟会をつくり要望活動を繰り返した結果、1969年(昭和44年)度から島根県が事業主体となり用地買収、1973年(昭和48年)度から掘削工事が始まりました。  
付帯工事の道路橋は、1976年(昭和51年)から1985年(昭和60年)までに「海崎橋」「嵩見橋」「学園橋」「宮尾橋」「加羅加羅橋」の5橋が完成しました。その後、区画整理事業によって1990年(平成2年)度までに「橋本大橋」「楽山橋」「百足橋」が相次いで完成しました。

一国土地理院25000分の1地図から